御南中学ニュース

創立５０周年記念行事

去る４月28日（月）御南中学校創立５０周年を記念し、式典と各種行事が行われた。行事は、同窓会名簿（全卒業生・教職員、約12,400名）の発行、校旗の新調、記念植樹などであった。なお、記念植樹は、同窓会関係者と生徒が共同で、桜（ソメイヨシノ）の苗木20本を、グランド西側隣接の笹ヶ瀬川堤防に植えられた。

御南パイロット地区

御南中学校や校区内の小学校・幼稚園・公民館付近の屋外に、少年を非行から守る“御南パイロット地区”の大きな立看板を見かけませんか。この看板は御南中学生の自作で、平成８・９年度御南地区が西警察署から、青少年健全育成のパイロット地区に指定されたためです。看板の他に３種類の掲示用ポスターもあります。

その内容は、推進大会の開催、校外補導、健全育成活動、よい環境づくり、運動の啓発広報などで、これら諸活動を展開、推進しています。これと並行して、ほぼ同様な内容で「子どもが輝くまちづくり」ふれあい事業（市教委主催）も実施されています。

このような運動は、青少年を持つ家庭はもちろんのこと、広く地域住民を含めた活動で、より大きな成果があがります。町内皆さんのご理解とご協力をお願いします。

航空写真で見る５０年前の町内とその周辺

中尾佐之吉さん（元会長）の好評な連載「わが郷土を語る」では、昔の社会情勢や農村での生活状態を知ることができ、毎号が楽しみです。

最近、昭和22年撮影の航空写真が見つかりました。これは西小学校にあるものの複製で、撮影目的は定かではありませんが、宗忠神社付近から笹ヶ瀬川向かいの今保あたりまで、田中野田を含み広く写っております。貴重品なので額縁に入れて、この間公会堂に飾りました。

これを見ると、当時は旧二号線沿いにはまだほとんどビルも家屋もなく、更地や水田のようです。写っている一帯は広く水田が広がり、文字どおり田園地帯そのもの、農家がまばらに点在している状態で、もちろん道路事情は今と全く違います。ちなみに、その頃田中野田町内の世帯数は36戸でしたが、今では実に530世帯です。

この写真を見ると、町内の景観は現在と隔世の感があります。“百聞は一見に如かず”、ともかく公会堂でいちどご覧ください。

《連 載》　わが郷土を語る（その３２）

中尾　佐之吉

呼び名の　“さん”づけ“ちゃん”づけ

1）昔は“さん”づけ

私は、大正６年(1917年) 生まれである。こどもの頃には近所の人から「サアちゃん」と呼ばれていた。“ちゃん”づけは、こどもへの愛称であろう。それが大人になっても、今のような年寄りになっても相変わらず「サアちゃん」とよばれる。そして、私も、最も身近な親しい人には、孫のある年齢の人なのに、○○ちゃんとためらわずに呼んでいる。習い性となったからだ。

ところで、私がこどものときは、近所のおじさん方を、「タカさん」（高衛さん）、「スウさん」（須真雄さん）、「イワさん」（岩夫さん）、「ソウさん」（宗太さん）等と“さん”づけで呼ばれていて、同年輩の方からでも決して“ちゃん”づけで呼ばれることはなかった。だから、“ちゃん”づけは、私のこどもの頃から始まったのではないかと思うのである。

2）そして、親は子を呼び捨て

私の母親の名は「美與」であるが、里の実母から「ミイ」と呼ばれていた。私の父は「良一」であるが、その父親からは「リョウ」と呼ばれ、父の兄も同じく父親から「イチ」（市次と云う名だが）と呼び捨てだ。私も、祖父や叔父（母の弟）からは「サアよ」と呼ばれていた。“さん”も“ちゃん”もつかない。しかし、それが当たりまえで、目上の者が目下の者を呼ぶのに敬称をも意味する“さん”づけはおかしいわけだ。（嫁さんは例外で、婚家先では敬意を表して“さん”づけが普通だが）

私が大人になる頃から自分のこどもでも○○ちゃんと呼ぶようになる。こどもも親を「おとうちゃん」「おかあちゃん」と“ちゃん”づけだ。そして、年が寄れば、おじいちゃん・おばあちゃんになる。むかし話では「…おじいさんは山へ芝かりに、おばあさんは川へせんたくに…」であったが。

3）“ちゃん”づけはいつ頃から

そもそも、○○さんと呼ぶ“さん”は人名にそえる敬称の「さま」（様）のくだけた言い方だし、○○ちゃんなどと呼ぶ“ちゃん”は、「お坊っちゃま」「お嬢ちゃま」という言い方から転化したものであろう。

島崎藤村の「生ひたちの記」によると、藤村が、明治１４年(1881年) ９歳のとき上京して泰明小学校に転入し、そこでの知り合いの友達を「六ちゃん」と呼んでいる。したがって、東京の方ではもうその頃“ちゃん”づけの言葉がつかわれていたわけだ。岡山のそれも田舎だったこの地方で、○○ちゃんと、こどもの名前を“ちゃん”づけで呼ぶようになったのはずっとおくれてのことだったことがわかる。

4）“ちゃん”づけで（父）親は怖くなくなる

私のこどもの頃の父親はまことに怖い存在であった。それは、一家の柱としての責任が肩にかかっていたし、あらゆる面に気くばりが必要で、（私の父などは、娘の衣装の品定めにまで口出ししていた。）それだけに、権威ももっていた。こどもは呼び捨てだしよく叱られもした。父親は、近所のこどもでも遠慮なく叱った。私の父ばかりではない、近所の小父さんも同様で、いたずらをするこども、言うことをきかないこどもは、何処の家のこどもであろうと、こっぴどく叱られたものである。（最近は、他家のこどもを叱ろうものなら、反対にその親から抗議をうけるという話をきくが）

私が父親となる時代には、自分のこどもも“ちゃん”づけで呼ぶのがあたりまえになっている。平日は家にいないので、こどもは母親まかせだから、父親の権威は地に落ちたも同然だ。こどもを叱るチャンスもないから、こどもにとって、父親は只の人にすぎない。近所のこどもは知らぬ間に大きくなっていて、どこの家の子か名前も知らないという情けないありさまだ。

最近は少子時代、こどもは宝となるわけだからますます可愛がられる。こどもは親の付属物でなく一個の人格をもつもの、成人すると親の思わくは無視されて巣だってしまう。親は、全くあわれな存在になったと云うべきか。

5）使われなくなった“やん”づけ

私が小学校へいっている頃、学校に、吉田嘉平さん（徳島県生まれ）と云う用務員さんがおられた。この村の人は、この人を、薩では「カアやん」と呼ぶわけだ。“やん”づけは、下男・下女を「ぢいや」「ばあや」（ねえや）と呼ぶ風習の、この「や」が「やん」になまったものであろう。だが、これは、人を見くだした言葉であった。（註）いまでは、下男も下女も一般家庭ではみられないし、家事手伝いのような方でも、すべて“さん”づけで呼ばれている。地位や身分によって差別してはならないのだから当然であろう。

註・昔は、どんな職種にも階級があり、その地位によって、ことばのつかい分けがあったようだ。江戸末期、日本の北辺で活躍した、かの「高田屋嘉兵衛（1769-1827）」も、若いとき、雇われ身分の時期は、「嘉ァやん」と云われ、地位があがっても、なお、「嘉兵衛どん」だ。商人として独立し、一家をなしてはじめて、同業者仲間から「さん」づけで呼ばれている。（司馬遼太郎著作「菜の花の沖」の記事より）

町内カレントニュース

◎　７月１日県南部健康づくりセンター（平田地区）がオープンします。これに先がけ、オープン記念イベントが６月29日（日曜日、13:00～15:30）に開催され、タレントによる講演、トレーニング体験、料理教室などがあります。詳細は同センターへ（TEL.246-6250）。

◎　御南中の西、笹ヶ瀬川に架かる通学橋の修理が、７月か９月に予定されています。

編集後記：暗いニュースですが、今年は今までに県内の死亡交通事故が極端に多く、とくに若い人（20才前後）と高齢者ドライバーの事故が目立ちます。交通事故多発地点のトップは、野田の交差点です。お互いに気をつけましょう。ところで、“御南大橋”（仮称）が開通すると、町内の交通量や車の流れがどのようになるか、今から心配です。